

阿紀は手袋をしながら表にでると、軒下の雪掻きを持った。

「あら、お義姉さんいいのよ。庭は私一人で何とかするから」

「今夜、吹雪くかしらね」

「テレビはそう言っているけど、風より雪の量よ」

「そうね」

弟嫁に卑屈に笑いかけている自分が嫌だった。

耕之輔が訪ねて来てから阿紀は何度も母屋に呼ばれて弟や圭子に意見されていた。中でも圭子の、

「お母さんが生きていなさったら泣きなさるよ」

という言い方が応えていた。確かにそうだろうと阿紀も思う。母は常識に生きて人だった。

阿紀は黙々と庭の雪を掻いた。納屋に行く道だけは確保しておかなければならない。一夜の雪で母屋に行けなくなることもあるのだ。

しかし、今の阿紀はそれを願っていた。

今までひとりで暮らしてきて寂しいと思ったことはなかった。

耕之輔を知ってから寂しいと思うようになっていく。

耕之輔が傍に居ないことも勿論だったが、彼以外のことでもひとり考えていると寂しくなり、ひとりであることを痛感させられる。

阿紀はつくづく友だちが欲しいと思った。あの二十才の駆け落ち以来、友だちらしい友だちは避けてきた。みずから世間を逃れて染織という穴の中でひとり生きてきた。その生活の貧しさをいやという程思い知らされる。

雪掻きをしている内に小雪が舞い始めた。

「やっぱり、予報は当たりそうね」

「みたいねえ」

と空を見上げてみる。うらめしい鉛色の空だ。

「いくら掻いても掻いても一度ドカンときたら元の黙阿弥なんだから。お義姉さん、お茶

にしましょう。長岡のお菓子があつたの」

「そうね、御馳走になろうかしら」

甥や姪の相手をして、この気塞ぎをまぎらわすのもいいかも知れない。

母屋に行くつと、しかし、子供たちは居なかつた。

「あら、チビちゃんたち居ないの？」

「この間からバレエを習いに行つてるの」

「バレエつてあの踊るバレエ？」

「そうなの。紀子はともかく達夫なんかには習わせたつてつて言つたんだけど、義理で仕方がないの。私の友だちがバレエ教室始めちやつたものだから」

「達夫よくウンと言つたわね」

「喜んで行つてるわよ」

母屋には不思議な空気がある。この甘い粘つこさが嫌だつたのだが、今は変に暖かな懐かしいものに思えた。

「坂戸先生からは連絡あるの？」

圭子がお茶を入れながら突然思ひ付いた言い方をした。

「ええ、山口にお帰りになつたみたい」

「みたいつて。……気がもめるわね」

ガラス戸にドンツと響くものがあつた。

女二人思はず顔を見合せて耳を澄ます。

微かに余韻を引いて雷のこだまが手紬の糸のように走つてゐる。

間違ひなく「雪起こし」だつた。

雪起こしは、雪を呼ぶ雷のことをいう。

「やっぱり来たわ」

圭子があつた。越後の女二人は思はず身構える。本格的な冬の到来だ。

窓外はもう暗くなりかけてゐる。雪に照り返して変に明るい暗さだつた。

離れに返るとひとりの世界である。

阿紀は人に訊かれると「気がついたらやつていた」と答えることにしてゐるが、そうでないことは阿紀自身がよく知つてゐる。

何処かで仕方なく始めた、という思ひがある。ひとりで生きなければならなかつた時、たまたま傍に機があつた。機に救われてまぎらわしてゐる間に、面白みも分かり、いくらか向上もした。

十年近く経つて公募展に出した作品が人目を引き、いつか作家と呼ばれるようになってゐる。ただそれだけのことではないか。人生つてこんなものだつたか、と思つうのも年のせいでらうか。見えてきたわけではなかつたが、先が見えてくる気は確かにあつた。

阿紀は、耕之輔と一緒に見た魚沼神社の阿弥陀堂を思っていた。あの兜のような短い軒にもこの雪は押し付けているに違いない。方形の屋根だけが白く厚く、お堂の本体が黒く沈んでいるに違いない。阿紀は立ち上がっていた。

「今のうちだわ」

セーターの上にキルティングのタウンジャケットを着込むとカメラを持って表に出た。耕之輔からはここ三日、何の音沙汰もない。浅谷窯でどんな事態が起こっているのか、想像もつかなかったが、いいことでないのは確かである。いいことなら直ぐに知らせてくる耕之輔だった。嘘を言わずに、心配させないためには、耕之輔は黙るしかないのである。それが阿紀にも分かっている。

乾いた雪粒がフードを叩くのを小気味よく思いながら、魚沼神社までの道は轍が凍りついて長靴は何度も滑った。屋根に登って雪下ろししている農家の人が雪を隔てて点描に近づいている。

境内の新雪は降り積もるままに委されている。阿紀は一步一步踏み締めながら進んだ。

阿弥陀堂の屋根は思ったより雪を乗せて、頭にたらいを乗せた大原女のようなだった。

阿紀は深く掌を合わせてから、カメラを構える。

背景の杉から雪の塊がドサツと落ちて下枝に散る、その瞬間を狙ってシャッターを切った。

阿紀は砕け散る雪の塊に潔さを見ていた。

この写真を早く耕之輔に見せたいと思いつながら、ふと、阿紀自身を耕之輔に晒した夜を思っていた。女の芯を見破られた恥ずかしさだった。

何故だか分からない。不思議な連想だった。この清浄な雪とあの夜との間に何のつながりがあるのだろうか。分からないまま阿紀は慌てて身仕舞いを正していた。

阿紀は懸命にシャッターを切った。振り返ると彼女の足跡だけが乱れている。

新雪の余りの清浄さに阿紀の生臭さがあぶり出された感じだった。

離れに辿り着くともう屋内は暗く、払い落とした雪だけが煌めいた。

本音は耕之輔に抱かれないだけなのだ。耕之輔の強い腕で締めつけられ、揺れ動いて止まない不安を押し込んで欲しかった。

電話が鳴ったのはそんな時だった。急いで長靴を脱いで上がり、出てみると、母屋の圭子からだった。

「お義姉さん、何処に行ってたの？ さっきも長いこと電話が鳴ってたわよ」

「そう、一寸、雪の写真を撮りに行ってたの」

電話は耕之輔からに違いない。落ち着いてみれば、所詮待つしかない恋だった。

三面鏡を覗くとそれぞれに、耕之輔を好きだという馬鹿な女の顔があった。それでいいではないか。余計なことは考えまい。

食事の支度をする時間だったが、阿紀は機を前に立つと、灯を点け、そのまま座り込んでいた。機には耕之輔に贈る紬の縦糸が掛かっている。まずはこれを仕上げることだ。

腰を据えて杼を流してみる。舟型をした杼が小波のように並んだ縦糸の間を滑っていく。最初の滑りによって、その日一日の通りが快い日とそうでない日があった。気分の問題なのか天候の問題なのか、確かにあった。

自ずと動く手運びの中で、阿紀はいつか「織り」とは何だろうと真剣に考える。

単純には、糸という線を平らな布に変えていく作業である。一次元を二次元に変える作業だ。

しかし、うどんや蕎麦を練り直して板を作るのとはわけが違う。そこには交互に組み合わせさせていく概念があり、出来るのは糸のからみ合いと共に、小さく区切られた空間なのだ。見方を変えれば、漠然とした空間を明確な空間に仕切っていく作業とも言える。

阿紀はふと「無」を思った。空間は無である。

漠然とした無と明確な無。織りの世界で「目」と呼ばれるものについてもっと哲学的に考えてみる必要があると思う。

今、織られたばかりの布が腰の前にあり、その向こうは広い空間があるばかりだ。そこに用意された縦糸とそれを紡ぐ横糸がある。彼らの務めはあいまいな空間を明確な「無」に変えていくことではないのか。

事実、布の特徴とする保温と通気、肌合いは、この空間に支えられてのことである。

阿紀は目の前の紬に目を凝らして囲まれた細かい「無」を見据える。

今、何か大切な場面が近づいているのではなからうか。そんな気がした。その実体は掴めなかったが、この気持ちはしつかり見ておかなければならない。織りに携わる者として岐路に立っている気がしていた。手と足を半ば無意識に動かしながらワクワクするものがある。動かしているのか、動いているのか区別がつかなくなる時がある。

引き戸が開いて弟の勝次が入ってきた。肩に白いものが散っている。勝次は頭の雪だけを払って上がってきた。

「姉さんも頑張るなあ。あんまり機の音が続くんで、どうしたのかと思ってよ。めしは食ったのかい？」

気がつくと八時を回っていた。四時間近く織っていたことになる。

「調子よく行ってたから、食べるのを忘れてたわ」

背を伸ばすとポキポキと骨の音がした。腕が肩から上に上がらない。油が切れた感じだ。

「何か食う物探してきてやろうか」

「大丈夫、お昼の残りがあるから」

「そうかい。根を詰めるのもいいけど、軀を壊したらおしまいだぜ」

勝次は機の布を覗き込んだ。

「いいのが出来るな、展覧会用かい」

「まあね」

分かっていくくせにと阿紀は思う。圭子には耕之輔のための紬と話してある。

「もう止めるわ。御心配かけて済みません」

「そのほうがいい」

勝次が引き戸を開けると黒い幕に白い雪が音もなく落ちていた。

お腹が空き過ぎて直ぐには食べる気にもなれない。

間断なく粉雪が沈んでいる。まだらの点描を「霜ふり」というが、まさにそれだった。

一様な動きは動きがないのと同じだった。

阿紀は次第に静謐な思いになっていた。

二階に上がって箆笥から祖母の上布を出してみる。耕之輔から雪晒しのために預かってきたあれだ。

触ると麻特有の冷たさが指の腹に心地よく伝わる。

越後上布特有の光沢なのに変な艶がない。拡げて透かすと殆ど透明に近く、向こうがそのまま見透かした。

阿紀は両手に捧げるようにして階段を下りた。

並べて較べるとその違いは歴然としていた。

当然、織りたてと使い込まれた違いはある。麻と木綿の違いもある。しかし、それを越えて何か根本的な違いがあるように阿紀には思えた。

一口で言えば品位である。気品である。阿紀はがく然としていた。

新旧の違いはあっても織りの緊張に変わりはなかった。

光に晒して織りの目を点検する。

眼を近づけ遠ざけて見ている内に阿紀は一つの大きな違いを発見した。祖母の織りには一種身を引いているものがあり、阿紀のそれにはしゃしゃり出たものが感じられる。織っている、織られていると意識させるものがある。何がそうさせるのか、どうすればそれを消すことが出来るのか。

阿紀は二つを並べてその差の大きさに呆然としていた。

今までにも人の作品では思い当たることはあった。しかし、それは素材や柄の問題だったり、その組み合わせの違いくらいにしか考えていなかった。

そんな表面的な問題ではないことを今、祖母の上布は教えてくれている。

「作るのとは簡単なことだ。僕だって或る程度の物なら作れる。問題は如何に作らないかだ」
耕之輔の言葉が思い出された。その時は漠然と情緒的に聞いてしまったが、今、具体的にハッキリと見えてきた感じだった。

「小雪さらさら、どうにかなるだろう」

阿紀はもう一度つぶやいてから遅い夕食の支度にかかった。

耕之輔は竹へらを使って手捻り水指みずさしを削っていた。

「えいッ」

声にはならなかったが、気合いを掛けて削る。

仕事場の裸電球は周りの闇に吸いとられて暗かった。

冬の山風が静寂を一層引き立てていた。

「作るとは描くことか削ることか」

といった画家の言葉が思い出された。

思い切って削ったつもりが背中を伸ばして見詰めると切れがまるでなかった。

「駄目だ！」

言う前に大きな手が水指全体を捻り潰していた。鬼の手の指間に粘る泥が溢れ出る。

こんなことでは駄目だ、そう思いながらやるのが全てせましくなっている。覇気も力も切れもない。自分でも集中力の足りなさが分かっていた。分かっているが余計な思いが闇夜の蛍のように邪魔をして流れ去る。

その一つは阿紀への思いだった。

阿紀が心配しているだろうことは分かっていたが、今電話をすれば、更に混乱させることになるだろう。それ以上に余りの混乱と困窮に、阿紀が嫌気を起こして去りはしないかという恐れがよぎる。

何とか再建のメドだけでも立ってから、電話したかった。

阿紀の方からは全く掛かってこない。

耕之輔は改めて土を捻り始める。太めの紐を丸め重ねて水指の原型を積み上げてゆくのである。

作品の切れが悪い原因は耕之輔にも半分わかっていた。

昼間、耕之輔は売り物の茶器を作っている。常識に従った普通の作りで仕上げなければならぬ。今までは弟子の清水に任せて一切やらなかったことである。しかも、この切迫した中でそんな甘えたことは言っていられなかったし、岳父であり、今や怖い債権者である服部明信の要求に誠意を示すためにもやらないわけにはいかなかった。その手癖が夜の自分の仕事にも残ってしまうのだ。

無性に酒が飲みたかった。飲めば何か考えられそうな気がする。立ち向かう元気が湧いてきそうな気がした。しかし、ブレーキが効かなくなることも間違いなかった。自分でよく分かっている。

窓外の松籟は、先刻より更に強くなってきているらしかった。

車で走れば、十分ほどで自動販売機のある街の四つ辻に行ける。公衆電話のある酒屋の看板が見えるようだった。いや、台所へ行けば料理用の酒が少しくらいどこかに残っているかも知れない。清水と久美子はまだ居間で話しているのだろうか。

耕之輔はマフラーを首に巻いて出て行くとし、ようやく思い止まった。阿紀の顔が見えたからだ。彼の手は自ずと電話機に伸びていた。出れば「助けてくれ！」と叫びたかった。思いがけなく三つ目の呼び出しで阿紀は出た。

一瞬警戒するような間があった。

「もしもし、藤波です」

懐かしい阿紀の声だった。

「僕です。起こして御免ッ」

「まだ寝てませんわ」

これも一瞬あって後の冷静な声だった。耕之輔の耳に冷水を浴びせる凍った響きだった。耕之輔は混乱からどう対処していいか分からない。

「どうして？ 寝られないの？」

「電話の前で待ち構えていたの、掛かってきたら沢山文句を言おうと思って」

「御免。いろいろあったものだから」

「言い訳は聞きません！ 何日目だと思ってるっしやるの？」

言葉の厳しきとは裏腹に、語尾はもう涙声になっていた。激しい息遣いが日本海の荒波となって押し寄せる。耕之輔の耳元に切ない雑音が続いた。

「悪いと思しながら、いい知らせが出来ないもので」

「どうして、いい知らせでないと電話出来ませんか？」

あとは息切れで声にならない。阿紀の怒りが炎となって吹いてくるようだった。何を言いつても火に油を注ぐだけだ。耕之輔はひたすら謝るしかなかった。

「待つ身がどんなにつらいか一寸も分かっているっしやらないんだから。……でも、お元気でしたのね」

「ああ、元気は元気……」

「お元気ならいいの」

阿紀のたかぶりもようやく治まってきたらしい。

雪はやんだが、その分冷え込んでいた。阿紀は、寝られないまま土間の藍瓶が心配になり、調べに降りてきたところに電話が鳴ったのだ。

耕之輔は、帰ってきてからの推移を細かく話した。離婚届に捺印して京都に送ってあることも、清水が久美子と結婚して浅谷窯を継ぐことになるだろうとも言った。

「それは分かりますけど、どうしてお生まれになった家をお捨てにならないければなりませんの？」

「僕是不渡りの手形を出したも同然なんだ」

「破産ということ？」

「破産とは違うけど、似たようなことと考えると貰ったほうがいいかも知れない。融資してきた人間が、僕では信用出来ない、浅谷窯は任せられないというわけだ」

「それで貴方はこれから、何処にいらっしゃるの？」

「今すぐここを追い出されるわけじゃないさ」

経済にうとい阿紀には、法律的なことはまるで分からなかったが、耕之輔が窮地に立たされていることだけは分かった。

「ね、お会い出来ませんか？ お会いしたいの。お会いしてお顔を見ながら聞かないと、事情がよく呑み込めないし、そうでないと私安心できないわ。……私、徳島に行く用がありますの。そちらの近くまで行きますから、お近くの何処かで会って下さい」

耕之輔からの連絡が途切れている間、ずっと思索してきたことであつた。日ごとに現実味を帯び、阿紀の中では既成の計画のようになっていた。

「徳島なら車で行けなくもない。僕も徳島へ行くよ。徳島は藍染めの仕事？」

「ええ、薬すくの買い付けと藍瓶の見学です。今すぐでなくてもいいんだけど、早くお会いしたいし……それに雪が深くなると雪晒しのこともあるでしょ。……本当に無理なさらないでね。私はお宅の近くまで足を伸ばせるんですから」

「大丈夫。早く会いたいし、僕も阿波は一度も行ったことがない」

「では、早速計画を立ててみます」

「そうしてよ。二泊三日くらいなら何とかするから。こっちからも連絡するけど、出来たらそっちから電話してよ。家内は当分帰ってこないと思う」

受話器を置くと、小一時間が経っていた。お互い、近く会えることでやっと受話器を置けたのだ。

気がつくくと、凝り固まっていた胸の重石がはずれていた。あれほど耐えられそうになかったアルコール依存の症状も消えている。耕之輔は阿紀に救われた思いがしていた。軀の内に力が戻ってきた実感があつた。そして、阿紀に会うまでに、せめて将来の方向だけでもメドを立てたいと思う。

疲れがドドツと睡魔に変わっていた。

その頃、阿紀は蒲団の中で耕之輔との会話を反すうしていた。会いたい、と言ったのは阿紀の方からだった。会えばどんな夜になるかは分かっている。今になってひとり顔を赤く染めていた。

「女の私から何とはしたくないことを……これも年のせいかしら」

阿紀は銀行の預金を思い浮かべながら、今回の旅行費用は全て自分で負担しようと思つた。耕之輔は二泊三日と言つたが、日程的にはもつと可能なのかも知れない。そうだとし

たら、
どう言い出せば耕之輔を傷付けずに申し出られるだろうか、
とそんな言葉を探して
いた。